

保育者の考える「読解力」に関する研究

— 読み聞かせにおける絵本の選択理由から —

松井剛太・佐藤智恵・上村眞生

(2007年10月4日受理)

The Research of Early Childhood Educator's Reading Literacy
— Choice of picture-book to read a child —

Gota Matsui, Chie Sato and Masao Uemura

Abstract. The purpose of this study was to identify the reading literacy which early childhood educators think about. The reason of the picture-book choice of the 30 early childhood educators was analyzed. It had the picture-book which was suitable for two questions chosen from 5 picture-books. The first question was that “which is the picture-book you would like to read to a 5-years-old child. And the second question was that “which is the picture-book you would like to read to a 5-years-old child when you think the child acquire a reading literacy. The result, almost not early childhood educator choice the same picture-book in two questions and it wasn't seen similar reason in the choice of the picture book. In conclusion, first is that early childhood educators never almost conscious of the reading literacy when they read picture-book to the child. Second, it is clear that it was divided into 3 patterns related to input the information with reading literacy which early childhood educators thought. It suggests that we have to think the element about output with reading literacy in early childhood education for the connection to elementary school.

Key words: reading literacy, early childhood educator, picture-book

キーワード：読解力，保育者，絵本

I. 目的

2003年7月にOECD（経済協力開発機構）が実施したPISA調査（生徒の学習到達度調査）の結果が2004年12月に公表された（国立教育政策研究所，2004）。その結果，日本の児童生徒は「読解力」の得点でOECDの平均程度まで低下していることが明らかとなった。PISA調査における読解力は，「自らの目標を達成し，自らの知識と可能性を発達させ，効果的に社会に参加するために，書かれたテキストを理解し，利用し，熟考する能力」と定義されている。

このPISA調査の結果を踏まえ，文部科学省は2005年12月に「読解力向上プログラム」をとりまとめた。

ここでは，生徒の読解力の向上のために各学校で求められる改善の具体的な方向として，次の3つの重点目標を挙げている。第一に，テキストを理解・評価しながら「読む力」を高める取り組みの充実，第二に，テキストに基づいて自分の考えを「書く力」を高める取り組みの充実，第三に，様々な文章や資料を読む機会や，自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実である。学齢期の各学校では，教科国語のみならず，各教科及び総合的な学習の時間等の学校の教育活動全体を通じ，「考える力」を中核として，「読む力」「書く力」を総合的に高めるべく，授業の改善に取り組んでいる。ここで目指される読解力は，「読み」を単なる情報の読み取りととらえるのではなく，「書き」も含め

た表現する力も関連させてとらえる点で従来のものと大きく異なっている(市毛, 2006)。

ところで、ここで規定されている学齢児の読解力には、幼児期における読み聞かせの経験と読み手である大人の意図が関係している(森谷, 2002)。先のPISA調査で読解力が1位であったフィンランドにおいても、幼児期の終わり頃には、絵本の読み聞かせにおいて子どもに話の続きを考えさせたり、結末を反対にして別の筋立てを考えさせたりするなど大人が様々な意図を持って読み聞かせを行う。そして、それがモノヤコトについての理由を考えたり、相手を説得するようなことは遣いに慣れたりすることにつながっているとされている(内田, 2006)。

保育所や幼稚園では、保育者が日常的に絵本を保育に取り入れており幅広く使用している。しかし、保育者が絵本の読み聞かせに明確な意図を持っていることは少ない。和田(1995)は、絵本の読み聞かせにおいて、「保育者の選択の意図が明確であった絵本」は、42.3%であり、半数以上の保育者は無意図的に絵本の読み聞かせを行っていることを示している。また、意図が明確であったものについても、季節や天候に関連するもの(54.5%)、水遊びや描画と関連するもの(27.3%)、睡眠やきょうだいなど生活と関連するもの(18.2%)とあるように、子どもの読解力に関連する項目は見られなかった。保育所保育指針や幼稚園教育要領を見ても、絵本の使用は子どもがイメージをふくらませたり、想像を楽しんだりするための教材として位置づけられているため、保育者が絵本の読み聞かせにおいて子どもの読解力を意識することはほとんどないと考えられる。このような状況において、小学校以降の取り組みに幼児期の経験をつなげていく上で、保育者が読解力をどのようにとらえているか調査することには意義があると考えられる。

そこで、本研究では、保育者が子どもに読み聞かせをする際に選択した絵本、ならびに選択理由について調査する。そして、読み聞かせをしたい絵本を選択する場合と子どもの読解力をつけることを意識して絵本を選択する場合の選択理由を比較し、保育者が考える読解力を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 対象

調査の対象者はH県の保育所に勤務する保育者30名(全員女性; 平均年齢33.2歳; 平均保育経験年数9.97年)である。調査は調査者と保育者が机を介して対面して座り、調査者の提示した条件に適していると思う

絵本を保育者に選択してもらった後、選択した理由の聞き取りを行った。絵本は「こどものとも(福音館書店)」の年中向きに販売されている絵本から5冊を無作為に抽出した。調査は2006年8月に行った。

2. 手続き

まず、5冊の絵本に1番から5番までの番号をつけ(①しごとをとりかえたおやじさん, ②まめっこまめことおじいさん, ③のどかとそらのおもちや, ④ふうばあちゃんのあかいくし, ⑤てつたくんのじどうしゃ), 机に並べた。そして、調査者が保育者に「これは先生方の絵本を選択する際の基準に関する調査です。まず5冊の絵本を読んで内容を把握してください。時間は15分間です」と調査内容を説明し、15分間で絵本の内容を把握してもらった。その後、「それでは、今からこちらが質問をしますので、その条件に合うと思われる絵本を選択してください。同じ絵本を選択しても構いません。では、これから5歳の子どもが一人いると想定して読み聞かせをしていただきます」と伝えた後、以下の2つの質問をして絵本を選択してもらった。なお、クラス活動における読み聞かせだと、カリキュラム上の制約が生じてしまうと考え、自由遊びの場면을想定できるように、5歳児の子ども一人を対象にして質問した。

質問は、第一に、『子どもに読み聞かせをしたいと思った絵本を一つ選択してください』、第二に、『子どもの読解力をつけること』を考えて絵本を選択してください』である。そして、保育者が絵本を選択した後、その理由を聞き取った。また、調査は30名の対象者を15名ずつの2グループに分け、グループ別に質問の順序を入れ替えてカウンターバランスをとった。調査内容は対象者の了解をとり、ICレコーダーですべて録音した。録音した内容は調査を終えた後すべて書きおこし、分析の資料として用いた。

III. 結果と考察

1. 選択した絵本について

まず、保育者が各質問に対して選択した絵本の違いを調べた(図1)。その結果、どちらの質問に対しても、③の絵本を選択した保育者が少なかった。子どもに読み聞かせをしたい絵本は、①, ②, ④, ⑤の絵本にほぼ均等に回答が分かれたのに対して、子どもの読解力がつくと考える絵本は、②を選択した保育者が多かった。また、2つの質問に対して、同一の絵本を選択した保育者は2名のみであった。この結果、多くの保育者は読み聞かせをしたい絵本と子どもの読解力がつくと

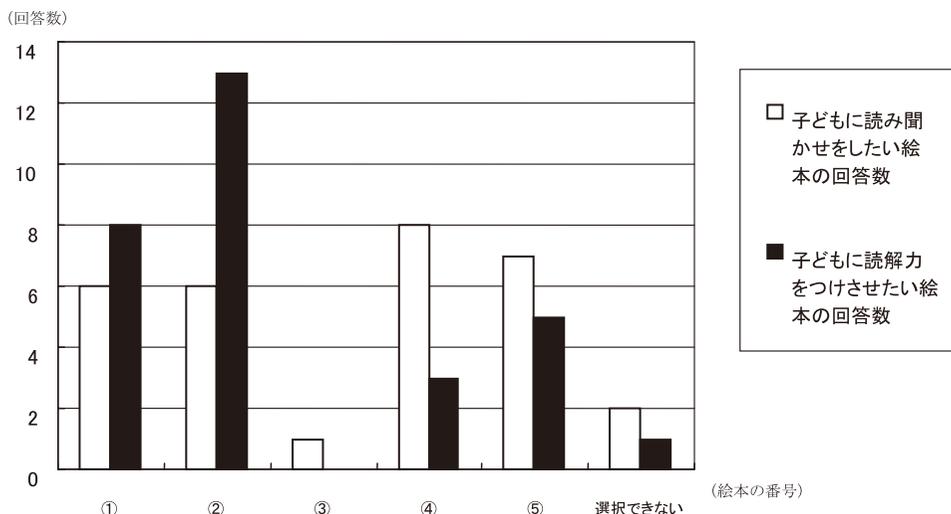


図1 保育者が選択した絵本

考える絵本では異なる絵本を選択することがわかった。

2. 選択した理由について

次に、各質問に対して、保育者が絵本を選択した理由を分析した。分析は、著者2名と本研究とかわりがない分析者2名の計4名で、保育者が絵本を選択した理由をすべて小用紙に写し、その後、KJ法の要領で類似した回答をカテゴリーに分類した。以下、子どもに読み聞かせをしたい絵本の選択理由と子どもの読解力がつくと考える絵本の選択理由の分析結果を述べる。

1) 子どもに読み聞かせをしたい絵本の選択理由

保育者が述べた子どもに読み聞かせをしたい絵本の選択理由をKJ法でカテゴリー分けした。その結果、「おもしろくて楽しい」、「自分自身が好き」、「ストーリー展開」、「気持ち」、「身近」、「教育的観点」、「色彩がよい」、「その他」の8つのカテゴリーに分類された(表1)。

結果、意見の多かった2つのカテゴリー(「おもしろくて楽しい」、「自分自身が好き」)が、子どもに読み聞かせをしたい絵本の選択理由の中心にあった。「おもしろくて楽しい」のカテゴリーは、子どもが楽しめる内容の絵本を読み聞かせしたいという理由であり、7名が該当した。この対極には「自分自身が好き」のカテゴリーがあった。これは、保育者自身が好きな話、好きな絵本を読み聞かせしたいという思いであり、6名が該当した。このように、保育者が読み聞かせをする際に絵本を選択する理由は、「子どもを中心に考えるか」、「自分を中心に考えるか」、で2つに分かれる

ことが示唆された。

絵本そのものの魅力を理由としているものには、「ストーリー展開」、「気持ち」、「色彩がよい」の3つのカテゴリーが見られた。「ストーリー展開」は、絵本全体のストーリー性や展開の良さが5歳児に合うという理由であった(4名が該当)。「気持ち」は、絵本の内容が子どもの気持ちに訴えるよさを持っていることが述べられていた(3名が該当)。「色彩がよい」では、絵本に使用されている色彩のよさが理由に挙げられており、視覚的に楽しめることが重視されたと思われる(2名が該当)。これらを理由に挙げた保育者は絵本における絵の効果や雰囲気の高さを大切にしていることがわかる。

子どもの生活に密着したものを選択の理由としているのが、「身近」、「教育的観点」のカテゴリーである。「身近」は絵本と実生活を結びつけて子どもの理解を促す意図が見える(3名が該当)。また、「教育的観点」は、仕事の大変さや多様さを理解させることを意識した理由となっており、やはり生活に根づいている事柄を伝えることを意図したものといえよう(2名が該当)。「その他」のカテゴリーは、それぞれが独立した理由である。なかには、子どもや場面の設定によって変わるので選択できないという回答があり、保育の中でさまざまな状況に配慮して絵本を選択していることがわかった(2名が該当)。

2) 保育者が子どもの読解力がつくと考える絵本の選択理由

保育者が子どもの読解力がつくと考える絵本の選択

表1 保育者が子どもに読み聞かせをしたい絵本：カテゴリと内訳

カテゴリ	該当意見（選択した絵本）
おもしろくて 楽しい	<ul style="list-style-type: none"> ・次々と話が展開して楽しかったから。子どもには楽しいものを選ぶ。(1) ・おもしろいから。こどもにもユーモアが通じるのかなと思った。(1) ・笑えるから。子どもの声が開いてきそうだから。絵でも文でも子どもが大爆笑しそうだから。(1) ・おもしろくて楽しい。(4) ・同じようなリズムの繰り返しがおもしろく、子どもと一緒に楽しみたい。(5) ・子どもは車が好きだから。車ができていく過程が楽しめる。(5) ・多分車が好きだろうなと思ったから。(5)
自分自身が 好き	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が好きな本だから。(2) ・自分が好きなもの。子どもに読むときに思いが伝わりやすいから好きなものを選ぶ。(4) ・この絵本が好きだった。(4) ・暖かい話。私が好きなお話だから。(4) ・絵が分かりやすくインパクトが強い。自分の好みもある。(5) ・自分がおもしろいと思うものを子どもと読みたい。(5)
ストーリー 展開	<ul style="list-style-type: none"> ・話がしっかりしていて展開がおもしろい。子どもが「あれ？」という感じで引き込まれると思った。(2) ・ストーリーが長いけど、5歳児だと理解できると思った。(2) ・ストーリー性があり、長め。5歳児にはちょうどいい。(2) ・丸から車になり、最後はお母さんと一緒に乗っていくという流れがいいと思った。(5)
気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・嬉しいことを探しているのを読んで、暖かい気持ちになった。(4) ・おばあさんが何をするのかということや、櫛を探す場面で「どこかな」と考えたりすることで、子どもと共感しあえるから。(4) ・車輪に表情があったり、繰り返しがあったりするの、落ち着いて見えると思った。最後に母親が出てくるのも安心感につながると思う。(5)
身近	<ul style="list-style-type: none"> ・生活のことが書いてあるので、子どもも分かると思う。(1) ・今、担任している5歳児が怖いもの、沼から出てくる主などに関心を持って話の内容に入ってくると思ったから。(2) ・このおばあちゃんが子どもに身近かなと思った。ふんわりしていて好き。(4)
教育的観点	<ul style="list-style-type: none"> ・1つのことをやり遂げる大変さ、仕事は大変なことを伝えたい。(1) ・それぞれの登場人物にあった仕事があり、それぞれのいいところや役目があるということを分かってもらいたい。(1)
色彩がよい	<ul style="list-style-type: none"> ・色が変わっていく、夢のあるブランコにのるという所で選んだ。(3) ・おばあさんがお母さんからもらった赤い櫛が可愛かった。色彩がきれいだから。(4)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・文字数があつたのと、難しい絵本だなと思ったから。(2) ・その子によって違うから1冊というのは選べない。集中力のない子には楽しい絵本、ある子には高度なものを選ぶ。(選択できない) ・子どもや場面の設定によって異なる。(選択できない)

理由は、「難解」、「長文」、「平易」、「考えさせる」、「身近」、「その他」の6つのカテゴリに分類された(表2)。

「難解」のカテゴリでは、「読み込む中で理解できると思う」など、まず子どもが難しい絵本をしっかりと読むことを重要ととらえる理由が多かった(7名が該当)。「長文」では、物語が長いことを理由に挙げており、長いものをしっかりと聞くことが大切という意見が多く見られた(6名が該当)。これら2つのカテゴリが、子どもの読解力がつくと考えられる絵本の選択理由の中心にあった。このように、保育者は読解力をつ

けるためには、多くの文章や言葉に触れることを重視し、「読む」、「聞く」といったインプットを重視していることが示唆された。

だが、「難解」、「長文」のカテゴリと対立するカテゴリとして、「平易」のカテゴリも見られた(6名が該当)。ここでは、比較的平易な文章や内容の絵本だからこそ、子どもの理解が促進されやすいという理由が多く、絵本を理解することを読解力ととらえていることが考えられる。これと同様に、子どもが絵本を理解することを重視しているカテゴリに、「身近」

表2 保育者が子どもの読解力がつくと考える絵本：カテゴリと内訳

カテゴリ	該当意見（選択した絵本）
難解	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事に役目があることを、読み込む中で理解ができると思う。(1) ・ことばが複雑だから、理解するのにいいと思った。(1) ・一番難しかった。5歳なら、読んでいるうちに理解できるのではと思った。(1) ・最終的に主人公がいなくなるが、「どこかにいるんだよ」という部分を、子どもが読み込んで理解する部分。(2) ・ちょっと難しいなと思ったから。(2) ・話をよく聞かないと理解しにくい。よく聞くことで読解力につながるのではないかと思う。(2) ・(内容が) くり返しでなく、ストーリーの展開を理解していく力がないと分からないから。(2)
長文	<ul style="list-style-type: none"> ・文章が多いのと展開が分かりやすい。絵と文が同時に子どもに届きやすいかなと思う。(1) ・物語が長い。(2) ・長文だから。話を聞くのは学校に行っても必要なことなので、いきっかけになると思った。(2) ・長い絵本だからじっと聞かないと分からない。(2) ・話が長い、内容が奥深い。ストーリーが詰まっているから。(2) ・文が長く表現も難しい。(2)
平易	<ul style="list-style-type: none"> ・ストーリー性があり、くり返し子どもにすんなり入っていく。(2) ・分かりやすい、最後にきちんと結果が出ているので、子どもには納得しやすい。(4) ・一番簡単でくり返しの多い、分かりやすいという点。読解力という点と難しいが、まず分かりやすいものから始めると思う。(5) ・簡単な内容の気がしたから。その方が読む力がつく。(5) ・だいたい分かりそう。先が見通せるから分かりやすいかなと思った。(5) ・くり返しが多いので、理解しやすいと思った。(5)
考えさせる	<ul style="list-style-type: none"> ・聞きながら頭の中で反復しないと難しいから。(1) ・難しいかなとも思ったが、考えながら読めるのではないかと思った。(1) ・考えないと理解できない内容だから。(1) ・聞いて頭の中で考えることができる。(2) ・「なぜなのかな」と考える所があるから。(2)
身近	<ul style="list-style-type: none"> ・話が身近に思えるので、入り込みやすいから分かりやすいと思う。(4) ・誕生日の話で、みんな自分にあることなので理解しやすいと思う。(4) ・生活に近い内容だから。(5)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・主人公のおじいさんが、次々と挑戦、失敗の繰り返しをしていく部分がおもしろいと感じた。(1) ・台詞の部分唱歌のように読んでいける本だと思った。(2) ・子どものレベルの読解力というのがよく分からない。話のレベル的にどれも一緒くらいかなと思ひ。どれでもいいのではないかと思った。(選択できない)

のカテゴリがあった（3名が該当）。ここでも、「生活に近い内容だから」とあるように、日常生活と関連づけて理解しやすい点が選択理由として挙げられていた。また、子どもが絵本の内容を理解するまでの過程を重視しているものに、「考えさせる」のカテゴリが見られた（5名が該当）。これは、「聞きながら頭の中で反復しないと難しいから」というように、子どもの考える力を最も意識した回答であった。「その他」は、いずれにも属さない3つの意見が該当した。

3. 選択した絵本と理由との関連について

さらに、選択した絵本と上述で分類した選択理由のカテゴリとの関連についてまとめた（表3, 4）。その結果、「保育者が子どもに読み聞かせをしたい絵本」では、選択理由のカテゴリと選択した絵本の関連性は見出せないものの、「保育者が子どもの読解力がつくと考える絵本」では、「長文」、「難解」、「考えさせる」は、①、②の絵本に該当し、「平易」、「身近」は④、⑤の絵本に偏る結果が得られた。この「長文」、「難解」と「平易」、「身近」は絵本の選択理由において、対立するカテゴリでもある。つまり、保育者が考える読

表3 保育者が子どもに読み聞かせをしたい絵本のカテゴリと選択した絵本の内訳

選択した絵本 カテゴリ	①	②	③	④	⑤	選択できない	計
おもしろくて楽しい	3			1	3		7
自分が好き		1		3	2		6
ストーリー展開		3			1		4
気持ち				2	1		3
身近	1	1		1			3
教育的観点	2						2
色彩がよい			1	1			2
その他		1				2	3
計	6	6	1	8	7	2	30

表4 保育者が子どもの読解力がつくと考える絵本のカテゴリと選択した絵本の内訳

選択した絵本 カテゴリ	①	②	③	④	⑤	選択できない	計
難解	3	4					7
長文	1	5					6
平易		1		1	4		6
考えさせる	3	2					5
身近				2	1		3
その他	1	1				1	3
計	8	13	0	3	5	1	30

解力と絵本の特徴には関連性があることが示唆された。そこで、絵本の特徴を調べるため、各絵本のページ数、文章数、文節数を数えたところ、ページ数に差はないものの、文章数、文節数には差があることがわかった(表5)。さらに、①、②の絵本と④、⑤の絵本を比較すると、①、②の絵本のほうが文節数が多かった。つまり、保育者が読解力を意識して絵本を選択する場合、絵本の内容以外に文節数にも影響を受けることが示唆された。

IV. 総合考察

本研究では、保育者が絵本の読み聞かせの際に選択する絵本の選択理由を調査した。その結果、以下の3点が明らかとなった。

第一に、保育者における絵本の読み聞かせの動機と読解力との関連について、保育者は読み聞かせをする際に、子どもの読解力を意識することはほとんどないことが明らかとなった。「保育者が子どもに読み聞か

せをしたい絵本」と「保育者が子どもの読解力がつくと考える絵本」における絵本の選択理由を比較すると、「保育者が子どもに読み聞かせをしたい絵本」の選択理由には、「ストーリーが長め」、「文字数があった」というように読解力と関連するような理由はごく少数であり、「保育者が子どもの読解力がつくと考える絵本」で述べられた選択理由とほとんど重複していなかった。さらに、「保育者が子どもに読み聞かせをしたい絵本」では、「おもしろくて楽しい」、「自分が好き」、「気持ち」のカテゴリにあるように、絵本の選択に情感を含める点が見られたが、「保育者が子どもの読解力がつくと考える絵本」の選択理由には見られなかった。このことから、保育者は絵本の読み聞かせに、おもしろさ、楽しさ、また登場人物の気持ちになるなど、子どもの情動面への意識が強くあるため、日常の読み聞かせの中で子どもの読解力を意識することは少ないことが明らかとなった。秋田・無藤(1996)は、幼児への読み聞かせに対する母親の考えと行動を調査している。その結果、読み聞かせの方法には、子ども

表5 絵本の特徴

①「しごとをとりにかえたおやじさん」 山越一夫 再話 山崎英介 画 出版1974年
昔、おこりっぽくていつもおかみさんに文句を言っているおやじさんがいました。ある日、おかみさんはそんなにおこるなら仕事を取りかえようと申し出ました。おやじさんも大賛成で、翌日はおかみさんが牧草刈りにいき、おやじさんは赤ちゃんのめんどろをみながらバター作りや、牛の世話をしますが、次々大変なことが…。ドタバタぶりが何ともおかしい昔話です。19×26cm 32ページ 文章数48 文節数376
②「まめっこまめことおじいさん」 松野正子 作 小西英子 画 出版1993年
おじいさんが山道で拾った一粒の豆が、翌朝小さな女の子になっていました。おじいさんは、まめっこまめこと名乗るその小さな女の子を肩に乗せて旅に出ました。まめことおじいさんは行く先々で人々の仕事を手伝いながら楽しく旅を続けていきましたが、ある村で悪い沼の主が子どもを生け贄にとろうとしているのに出会いました。二人は沼の主と対決します。19×26cm 28ページ 文章数69 文節数572
③「のどかとおちのおもちや」らる・いしはら 作 出版2001年
のどかはアヒルのおもちやをもって森に遊びにいきましたが、アヒルのおもちやが森の奥に走っていったので、動物たちといっしょに追いかけていきました。するとそこに空のおもちやがいて、体を「ぼんべん ぼたん」と広げ、青空を作ってくれました。みんなで空の中を飛んで遊んでいると、やがて夕焼け空に、星空になり…。はめ込み切り絵による幻想的な絵本。19×26cm 28ページ 文章数29 文節数168
④「ふうばあちゃんのあかいくし」 鹿目かよこ 作 出版2000年
ふうばあちゃんは、赤い櫛がうまく髪にささった日には、いいことが起きます。今日も櫛をさして庭にいくと、カリンの実を見つけ、ヤマモリの家を見つけ、ラズベリーの実をたくさん摘むことができました。ところが、ジャムを煮ているうち、いつのまにか櫛をなくしてしまい大あわて…。でもようやく見つけた時、孫たちがおばあちゃんの誕生日のお祝いにきてくれました。19×26cm 32ページ 文章数79 文節数300
⑤「てつたくんのじどうしゃ」わたなべしげお 作 ほりうちせいいち 絵 出版1969年
てつたくんが歩いていると、車が1つ、2つ、3つ、4つ転がってきて止まりました。次には棒が2本とんとん歩いてきて2つの車輪の心棒になり、転がりをはじめました。てつたくんもついていくと、車輪は板やエンジンに出会って、自動車ができあがりました。自動車は坂道を走っていきますが、曲がれません。てつたくんはハンドルを持ってきて、上手に運転しました。19×26cm 28ページ 文章数32 文節数232

との話し合いや内容の説明を重視する「会話型」と、読めるところは子どもに読ませたり、一人で読めるよう読み方を教えたりする「一人読み促進型」の2タイプの方法があることを述べている。そして、読み聞かせの意義として、「文字・知識習得」を重視している母親は、「一人読み促進型」の行動を取りやすいことを明らかにしている。本研究においても、読解力をつけさせるという条件下では、保育者の絵本選択に情動的なやりとりが感じられなかった点で母親の意識と合致することが示唆された。

第二に、絵本の特徴に関連して、「保育者が子どもに読み聞かせをしたい絵本」では、「色彩」のカテゴリーにあるように、絵本における絵の要素に関連する理由がいくつか見られたのに対して、「保育者が子どもの読解力がつくと考える絵本」には少なかった。また、文節の多い文字の要素が強く表れている絵本のほうが、「保育者が子どもの読解力がつくと考える絵本」において選択数が多かった。PISAにおける読解力には、図やグラフなどデータを視覚的に表現したものの読解も含まれている。絵本において、絵は読者に対して視覚的に情報を伝える。このような絵本における絵の持つ意味や重要性は、「保育者が子どもの読解力がつくと考える絵本」の選択理由としてあがらなかった。すなわち、保育者の考える読解力には、絵の要素

から子どもが情報を読み取る力についてはあまり意識されていないことが示唆された。

最後に、保育者の考える読解力と読解力向上プログラムにみる読解力との違いが明らかとなった。保育者が子どもの読解力がつくと考える絵本の選択理由と選択した絵本の特徴を見ると、保育者の考える読解力が3パターンになることが示唆される。まず、一番多く見られたのは、文章が多い絵本(①, ②)を選択し、選択の理由として「難解」、「長文」といった子どもが絵本を読むことや聞くことを重視している保育者であった。これは、読解の「読」を読解力の中心と考える「読」重視型といえる。次に、文章はさほど多くない絵本(④, ⑤)を選択し、選択理由として「平易」、「身近」という子どもが理解することを重視している保育者は、読解の「解」を読解力の中心と考える「解」重視型といえる。そして、選択理由として、「考えさせる」を挙げた保育者は上記2つの中間にあたる思考重視型と考えられる。これら3つのパターンは独立しているものではなく、以下の図のように連続性があるととらえられる(図2)。つまり、読解には絵本を、「読む」「聞く」ことに始まり、考えた後、理解につながるという連続性である。

この保育者が考える読解力はすべて子どものインプットに関連しているという特徴がある。しかし、読



図2 読解過程と保育者が絵本に期待するパターン

解力向上プログラムで示される読解力は従来のものと違い、書くことや自分の意見を述べることなどのアウトプットも含まれる。すなわち、読解力は「理解する」ことの先にある、「書く」「述べる」といった表現力も考慮されなければならない。この点において、保育者が考える読解力は、学童期以降の読解力向上プログラムで示される読解力と異なるといえる。今後、学童期以降への接続が考慮されるならば、絵本の読み聞かせの目的も含めた保育における読み聞かせのあり方について検討が必要になろう。

本研究の今後の課題としては、次の2点が挙げられる。第一に、本研究では絵本を読み聞かせるときの保育者の意識を明らかにしたが、実際の読み聞かせの方法については検討していない。保育者の読み聞かせに対する意識と行動の関係を明らかにしなければならない。これには、丹念な観察による質的データの蓄積が必要になるだろう。これに関連して、第二に、読み聞かせの方法とアウトプットも含めた子どもの読解力の向上との関連を明らかにすることが課題であるといえる。読解力向上プログラムで示されたアウトプットも含む読解力の向上には、保育者とのやりとりの多い「会話型」(秋田ら, 1996)の読み聞かせが有効であると思われる。絵本を媒介にした保育者とのやりとりの有無が子どもにどのような影響を与えるのか、これまでの知見に加えて小学校への接続も意識した形でのアウトプットの特徴も明らかにする必要がある。

【引用文献】

- 秋田喜代美・無藤隆 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討. 教育心理学研究, 44, 1996, 109-120.
- 市毛勝雄 「教育的解釈学」を超えた新しい「読解力」の提案. 現代教育科学, 49(9), 2006, 9-13.
- 国立教育政策研究所『生きるための知識と技能 - OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 2003年調査国際結果報告書一』ぎょうせい, 2004.
- Moerk, E. L. Picture-book reading by mothers and young children and its impact upon language development. Journal of pragmatics, 9, 1985, 547-566.
- 森谷幸子 幼児の言語習得における絵本の役割. 人間文化, 17, 2002, 153-160.
- 岡本夏木『ことばと発達』岩波書店 1985, 32-69.
- Robbins, C., & Ehri, L. Reading storybooks to kindergartners helps them learn new vocabulary words. Journal of Educational Psychology, 86, 1994, 54-64.
- Snow, C. E., & Goldfield, B. Turn the page please: situation-specific language acquisition. Journal of Child Language, 10, 1983, 551-569.
- 内田伸子 読解力の芽生えを促す幼児期の「言葉の力」. 初等教育資料, 809, 2006, 78-84.
- 和田香譽 保育者の絵本選択の意図に関する研究. 日本保育学会第48回大会発表論文集, 1995, 550-551.

付記 本論文の作成に際し、調査にご協力いただいた保育所の先生方、また、調査の実施にご協力いただいた祝小力さん、趙京玉さんに記して感謝申し上げます。
(主任指導教員 七木田敦)